

Player

YOUNG MATES MUSIC

3

No.337/1994

HARDWARE
SPECIAL

What's Up Now?

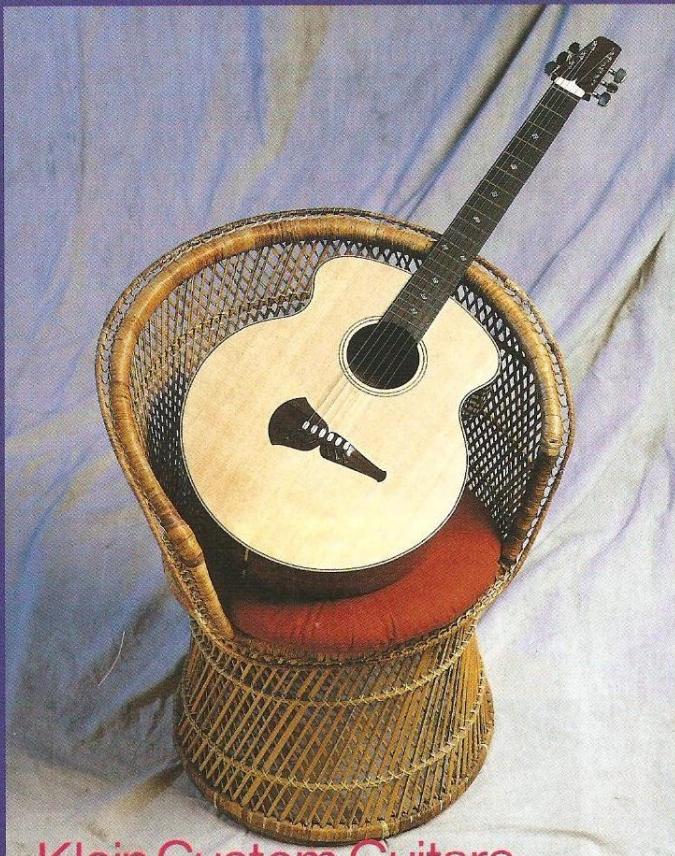
新しいギターの創造 Part1

GREG LAKE
STEVE HOWE
hide
DUFF MCKAGAN
JAN CYRKA
dip

JIMMY PAGE

INTERVIEW & THE GUITAR

MASTERS OF ROCK ● BRIAN MAY
MUSIC MAKERS ● 塚本 晃 (HEAVEN)
● SANDII VS 宮沢和史 (THE BOOM)
DEAR MY PARTNERS ● 清水 興 (HUMAN SOUL)
R.R.H.S. ● BRIAN MAY
THE VINTAGE FILE ● 1954 STRATOCASTER
CALENDAR ● LED ZEPPELIN



Klein Custom Guitars

“スタインバーガーは、ブロードキャスター・レスホール以後に誕生した唯一のオリジナル・ギターだ”という人がいる。現在あるギター／ベースの多くはトライディショナルなギターの設計思想を受け継ぎ発展させたものであるのにに対して、スタインバーガーは、デザイン、マテリアル、パーツ、構造、サウンドなど全てが独自な設計思想によって開拓されているためだ。昨年11月に行われた‘93楽器フェア’においてふたつのオリジナル・ギターが注目され話題となった。ひとつは超軽量の“バーカー・ギター”、そしてもうひとつは3次元ボディを採用した“スタインバーガー・Kベース”である。これらはかつてのスタインバーガーのようにトライディショナルなギターの持つ伝統的設計思想にとらわれることなくより自由で豊かな発想によってデザインされている。今回のハードウェア企画は、そんな自由で新しい発想から生まれたオリジナル・ギターの特集だ。

その第1回は、Kベースの生みの親スティーヴ・クラインの工房、“クライン・カスタム・ギターズ”。そしてもうひとつは今後謹むるライトウェイト・ギター“バーカー・ギター”だ。双方徹底紹介しよう！どちらのメーカーも独自の設計思想を持ち新しいギターの創造に夢をかけるギター・クリエイター達である。

新しい ギターの 創造

Part 1

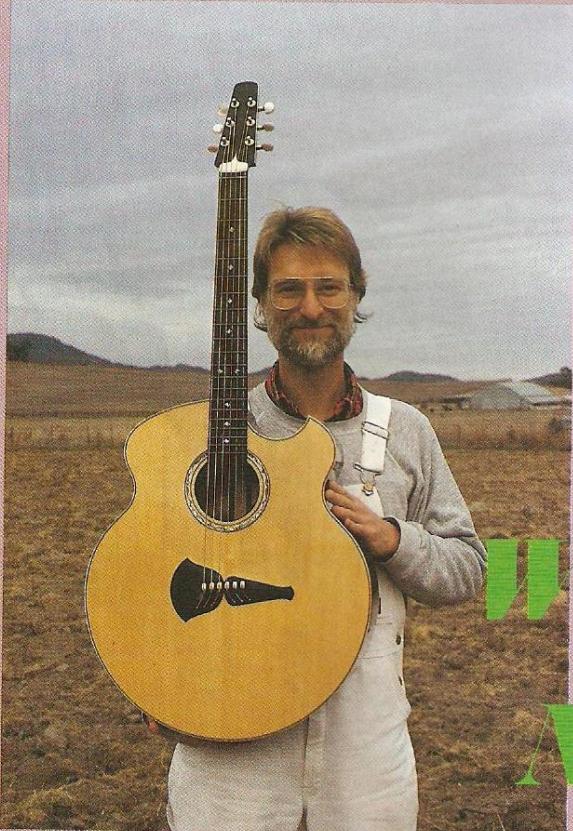


Parker Guitars

What's
Up
Now?

HARDWARE SPECIAL

Klein Custom Guitars



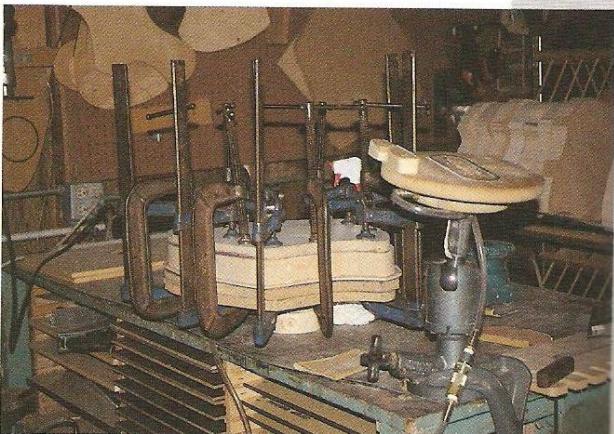
Report, Photos & Interview by MASA KONDO

“新しいギターの創造”。この言葉が最もよく似合うギター、それは“クライン”である。日本ではスタンバーガー・ブランドの中のひとつのプロダクションとして紹介されているが、そもそもとはカリフォルニアにあるハンドメイドのギター工房だ。製作家スティーヴ・クラインの作るギターは、エレクトリック、アコースティックに係わらず全てが個性豊かなデザインで一貫している。しかし、これは単にデザイン上の差別化をねらったアート・ワークではなく、独自の音響工学理念に基づいた設計思想に裏付けされたものだ。特にアコースティック・ギターに見られる設計思想はマーティン・ギターに代表されるそれとは全く異なり、ネック・ジョイントからブレイシングまで全てがオリジナルなアイディアによってデザイン設計されている。クライン・ギターは、プレイヤーのみならず、他のギター製作家、メーカーなどからも高い評価を受けており、スティーヴ・クラインの設計思想と製作技術の高さは、数あるギター工房の中でも注目に値する。

それではアメリカ西海岸はカリフォルニア州ソノマにある、クライン・カスタム・ギターズの工房を訪ねたレポートと、製作家スティーヴ・クラインのインタビューをお届けしよう……。



クライン・カスタム・ギターズの工房全景だ。3エーカーの敷地内にあるこの馬小屋風(失礼!)の建物がその工房。少し離れた所に住居、馬小屋などがある。周囲にはブドウ畠と民家が点在するだけで、あとは何も無い。あいにく天気が悪く、カリフォルニアの青い空は見えなかった。



スティーヴ・クライン・エレクトリックには、シトカスプルース、ウォルナット等がボディ材として使用されている。さらにソリッド・ボディ以外にホロウ・ボディのモデルもある。写真は、ホロウ・ボディのトップにスプルース・トップを接着している工程。

新

し

レッドウッド材の中を大きくくり貫いたセミホロウ(セミソリッド?)・ボディ。これにスプルースのトップが組み合わされる。最近あるプレイヤーからのオーダーで、このボディを使って7弦ギターを製作したとか。ややアーチドトップ系に近いサウンドになるそうだ。

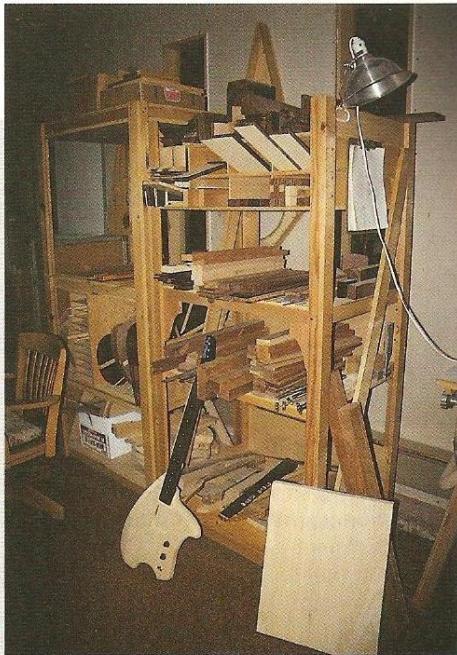




大変にめずらしいブラックウッドという材を使った単板ボディ。木目はもちろん、一部木の表面までもデザイン的に生かしたユニークなボディだ。かなり硬そうな木に見えるが、いったいどんなサウンドになるのだろう…。



ギター・デザインと、その演奏性、ホールド性を実験するために作られたユニークな実験用ボディ。中央のP.U.、ネックをセットする円盤は回転させることができ、どのような角度でセットするのか望ましいかを手軽に試すことができる。クラインではこのような実験が常に行なわれ、ギターがデザインされている。

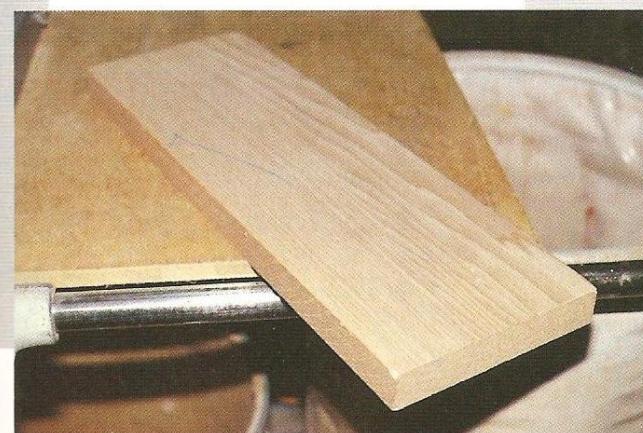


工房内のラックには、ネックや指板に使用する角材や板材、アコースティック・ボディ材などが無造作に積んである。アコースティック・ギターのネック材には珍しくローズウッド材が使用され、しかも音響面を考えトラスロッドはあえて採用していない。

エレクトリック・ギター用のヘッドレス・タイプ・ネック。左はポジション・マークがユニークなレイアウトになっている。しかもこのネックは、1弦側より6弦側のスケールがかなり長く、フレットは扇状に打たれたスランティッド・フレットを採用。より低音弦のテンションが強くなる。



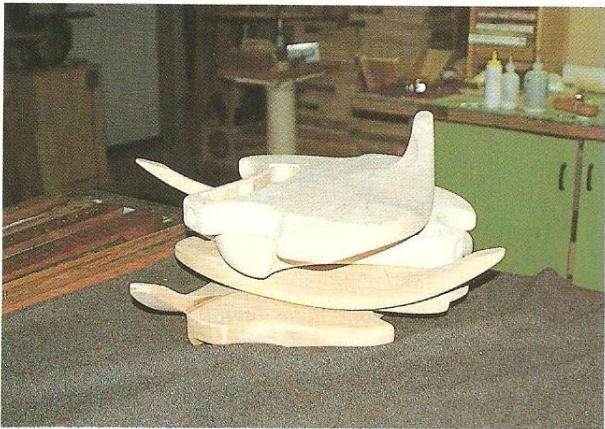
い ギ タ 一 の 創 造



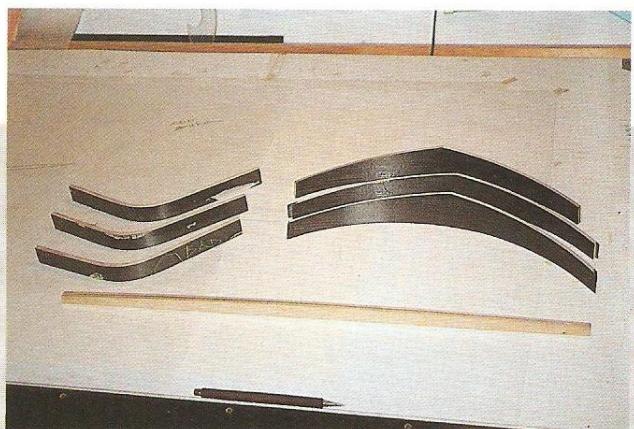
他の工房ではあまり使われることの無い“オ・マ・ボラ”という材。メキシコ産の軽量な材で、木目に関係なくあらゆる方向に均等な柔軟性を持っているのが特徴だ。「音の特性は、かなりブライトなトーンになる」とはクライン氏の弁。

美しい木目がピッシリと出たネックはアンディ・サマーズがオーダーしたもの。ネックのジョイント部にも彼の名前が書かれている。さらに5本のジョイント用ボルトを受ける部分には金属のボルトが埋め込まれ、よりパーフェクトなジョイントが行なえる理想的な設計。





作業台上に積まれたK-Bass用のアルダー・ボディ。三次元の曲面を取り入れた、個性的で美しいデザインだ。見ているとユニークだが、実際にストラップを使って弾いてみると驚くほど安定性とフィット感がある。でもちょっと製作工程は大変そう……。



アコースティックにはいくつもの種類のブレイスが使用される。黒い2種類のブレイスはグラファイトのフィルム状シートで木材を強化させた特殊なもの。軽量でしかも強度のあるこのオリジナル・ブレイスは、ブレイスのひとつの理想ともいえる。クライン・ギターはバーツひとつまでオリジナル。

新

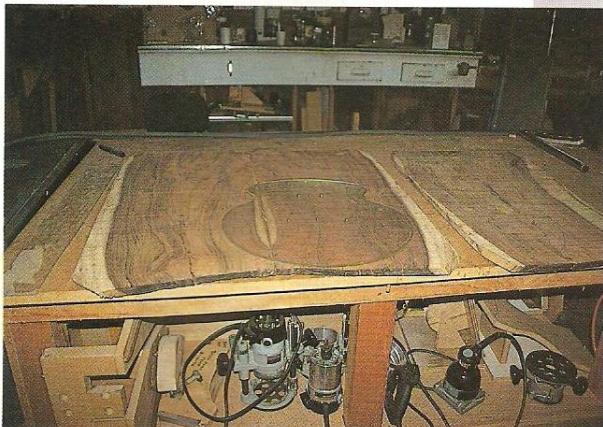
し

い

ギ

タ

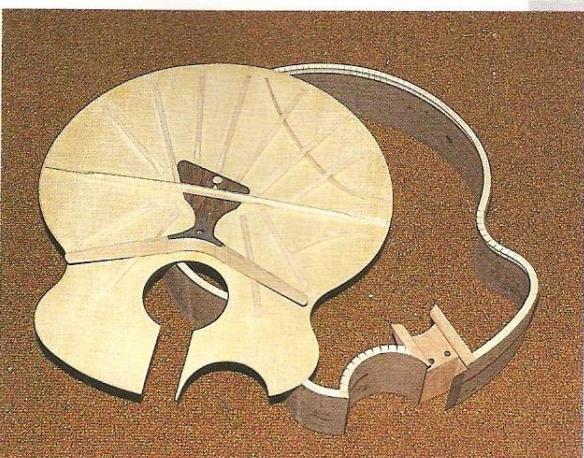
一



ハカランドの通称で知られるブラジリアン・ローズウッドのボディ材。アコースティックでは最高級とされている貴重な材だ。これはバック用に木取りが行なわれているところ。ハカランドは昨年ワシントン条例により、輸出入が禁止された今話題の材。



これがスゴイ！　自作ボディ・トップの構造実験装置。ボディ・トップにブリッジやブレイスを取り付け、この装置にセッティングすることによりトップの音響特性をチェックすることができる。クライン氏は、この実験装置を使いトップとブレイシング、ブリッジとの関係を研究した。初期に製作したアコースティックの数10本はこれを使っていたが、現在はあまり使用していない。



マーティンに代表されるXブレイシングとは全く異なる独自のブレイシング。クライン・ギターの心臓部とも言える。ホールすぐ下側に取り付けられているのがフライング・ブレイス。これはホール近くはトップに取り付けであるが両端はトップから離れている。トップの振動をより自由にするためのデザインで、これらのブレイスがクライン・ギターのサウンドを特徴付けている。

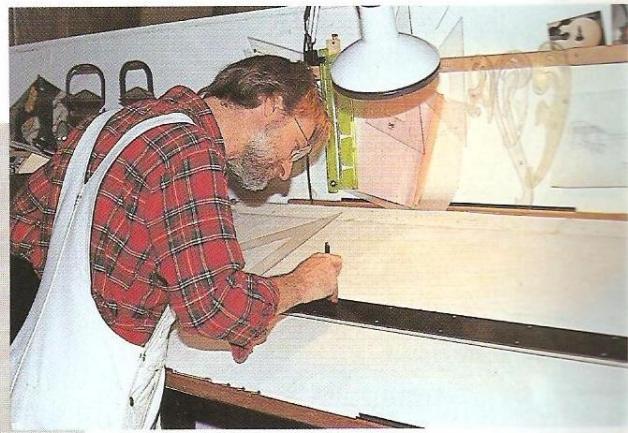


L字型になっているネック・ブロック。右はカッタウェイ用、左はノンカッタウェイ用だ。ネックを差し込むための溝が付けられ、この溝にネックがきっちりとジョイントすることになる。

Klein custom guitar



アコースティックのネック・ジョイント部。ネック側とブロック側の溝がスライド式に差し込まれるユニークなデザイン。経年による強度変化もあまり無く、非常に強固なジョイントが可能。また従来のジョイントに比べネックの着脱が容易なため、リペア面でも合理的な設計。



クライン氏の製図用デスク。デスクは二つあり、一方のデスクにはテイラーカーから発売予定があるといアコースティック・ベースの図面が置かれていた。このデスクでクライン・ギターのアイデアは形になっていく……。

の

創

造

オフィスの壁に掛けられたエレクトリックのプロトタイプ各種。左の黒いギターはロニー・モンローズのアイディアから設計されたMKモデル。ヘッドレス・タイプではないが、GKにもやや共通性のあるデザインだ。



マイケル・ヘッジスの使用でも知られるクライン・エレクトリック・ハープ・ギター。マイケルのものとは違い、ピックガードにはベッキ柄のものが使用されている。見た感じは弾きにくそうだが、実際に手にすると驚くほどコンパクトで実際にうまくデザインされているのか分かる。



What's Up Now?

左がL-45.7カッタウェイ。右はL-45.712ストリングス。どちらもボディ・バック&サイドにハカランダ材を使用したスペシャル・バージョン。かなり大型のギターだが、丸味のあるしなやかなデザインは女性的なイメージさえある。

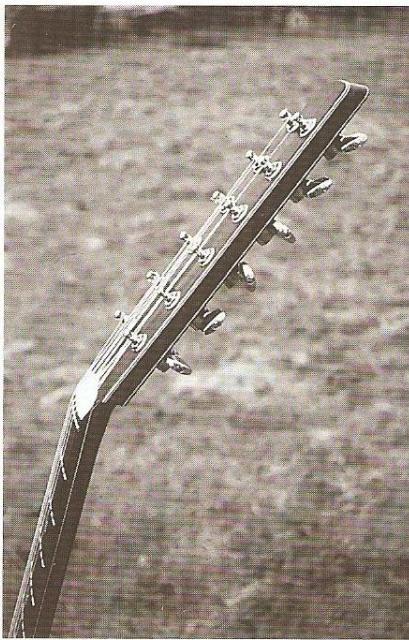


Own by Mr. Keith Young / Own by Mr. Bob Soto

カッタウェイのジョイント部。ヒールと呼ばれるジョイント用のネック・ブロックはボディと一体化し、外からは見えない。美しいデザインであると同時にハイポジションでの演奏性は極めて良い。“弾きやすくて美しい”これはクラインの基本コンセプトのひとつである。



tars



L-45・7、12ストリングスのヘッドストック。大きく丸いボディに対し、ヘッドストックはスリムでかなり長い。よく見ると細部にまで細やかなペインティングが施してある。チューニング・キーにはシヤーラーム6を使用。

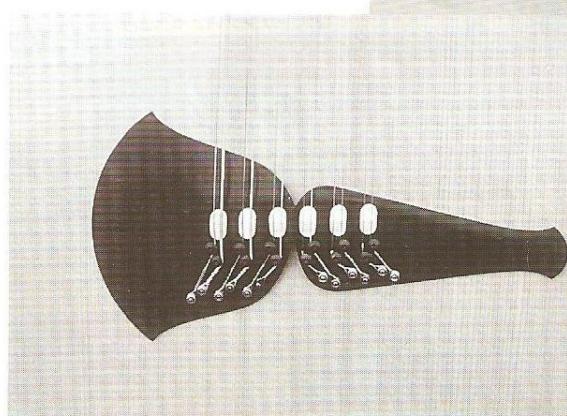


これがK-Guitar。スティーヴン・ミラーのアドバイスで設計したK-Bassのギターバージョン。基本的なコンセプトはベースと同じ3次元ボディを採用しているが、これはヘッド付。すでにEMGのP.U.をマウントしたこのギターを、スティーヴン・ミラーアンド・リードが所有している。ボディ材はスワンプ・アッシュを使用。

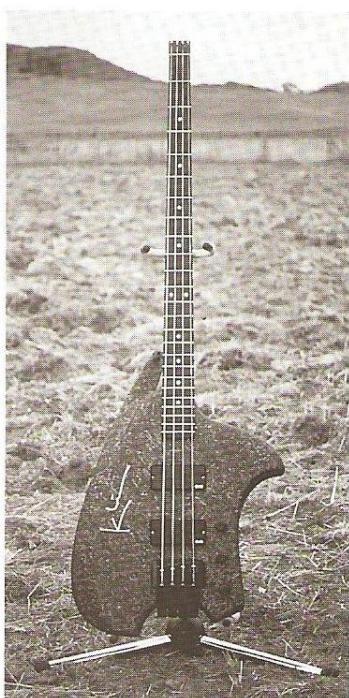
新

レ

ギ



インピーダンス・マッチング・システムと呼ばれる12ストリングスのブリッジ部。クランク・アコロイドスティックの大きな特徴のひとつだ。低音部と高音部でブリッジが二つに分かれ、さらに象牙部とサドルは各弦（これは12弦なので2弦づつ）独立の振動の干渉を最小限に押さえている。これにより各弦振動



タ

リ

の

創



スタインバーガーのネック、ハードウェアを取り付けたプロダクション用プロトタイプ。GKモデルの最終的なプロトタイプとしてスタインバーガーに提出されたものだが、なんだか踏んづけたお饅頭のように見えそう……。



造

最後はギターではなく、エレクトリック・ヴァイオリンのプロトタイプ。とてもユニークなデザインであると同時に、6弦というめずらしい仕様。ヘッドストックのシンプルで美しいデザインは、いかにもクラインならではのセンス。

What's Up Now?



まず“ギターの何がどのように、そしてどの方向へ作用しているのか”という事から研究したんだ。

STEVE KLEIN

INTERVIEW

ハンドメイドのギター作りにおいて、木工を中心としたクラフト・ワーク技術の高さがギターの評価につながることは多い。しかしクライン・ギターの場合、それだけではギターの魅力を語ることはできない。美しい現代的なアート・ワークはもちろん、音響工学の理念に基づいた独自な構造そのものがオリジナルであり、このギターの魅力なのである。あえてトラスロッドを廃したローズウッド・ネック、低音部と高音部がセパレートに分かれたインピーダンス・マッチング・システム・ブリッジ、グラファイト・フィルムをラミネートしたフライング・ブレイスなど、パーツのひとつひとつにクラインの新しいアイディアが生かされている。それでは、そんなスティーヴ・クラインに彼のギターに関する設計思想を語ってもらおう。

まずはギター製作を始めるに至った経緯と今までの経験から話してください。

生まれはサンフランシスコで、ローティーンの頃から色々な音楽に興味を持ち始め、それにめり込むまでそう時間はかからなかったよ。高校に入って、ギターをプレイしようと思ったんだが、エレクトリック・ギターとアンプを同時に買うお金など無かった。そこでギター自分で作れないものかと考えたんだ。当時知ってるリペアマンがショップを持っていて、そこにショッピング入りした。彼はリペアの工程を写真に記録していたので、それをよく見せてもらったよ。だから、最初は彼から教わった事が実に役立ったんだ。

最初に自分で作ったのはウォルナットのソリッド・ボディのギターだった。せっかく作るんだから、何か変わった形のギターを作ろうと思ってヴァックスのファンタムみたいなシェイプにしたんだ。あまり人に見せられるような代物じゃなかつたがね。ところがそのギターを買いたいという人が現れて、それが100ドルで売れたんだ(笑)。で、それに味をしめてその後8本ぐらいエレクトリック・ギターを作った。ボルトオンのものからスルー・ネックのものまでね。

アコースティック・ギターの製作はいつ頃から?

エレクトリックを作っていたのが60年代の後期で、アコースティックはその後だよ。マイケル・カーシャという物理化学者にめぐり会ったのがきっかけなんだ。当時私の祖父はバークレー大学で教鞭をとっていた関係でマイケルと知り会った。マイケルがギターという楽器の構造に興味を持ちだし、私が持っていた安物のアコースティック・ギターの構造を調べたりしたんだ。ところが、ギターのブレイス・パターンは物理化学者の立場から考えていたものとはまるで違っていた。そこでマイケルはギターの設計を物理的な見解から始めることにしたんだ。ただし彼はギターを実際に作る事に関しては素人だったので、エレクトリック・ギターを作った事がある私がお手伝いを仰せ付かったという訳さ。最初の頃は、彼のアイデアを私が実際の形にするという作業を行っていたんだ。

どういうコンセプトのギターですか?

とにかく形や構造が今までにあったものと全く違うギター、しかも楽器として優れているものを作ろうと思ったんだ。

ギター作りに必要な木工技術などは、どのように学んだのですか?

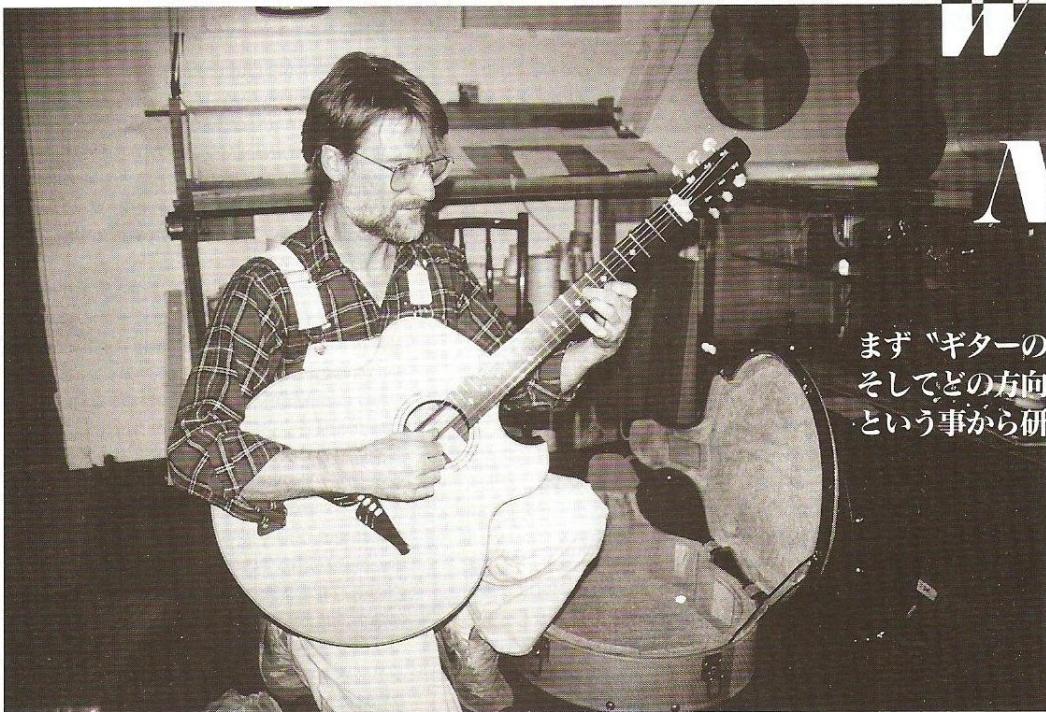
随分遠回りをしたよ(笑)。私は製作家に弟子入りした訳ではなかったからね。何人かの製作家に教えてもらおうと思ったのだが、当時は今と違って製作家同志で技術を公開しあうなんて事は無く、全くの秘密主義だった。だから試行錯誤の繰り返しで学んだんだ。

自分の工房を構えたのはいつ頃ですか?

最初にギターを作り出した頃で、家のガレージを自分で改造して作ったんだ。その後しばらくして、友達がオークランドで自動車修理工場をやっていたのでそこへ移った。それが74年の事だよ。2年程その場所で製作や修理をやっていたんだ。もっともフルタイムじゃなくって、他にも色々と仕事をやっていたけどね。ところが、友達がそのオート・ガレージを廃業しまって(笑)、それで父親に相談したら父がソノマに持っている3エー



What's Up Now?



まず“ギターの何がどのように、そしてどの方向へ作用しているのか”という事から研究したんだ。

STEVE KLEIN

INTERVIEW

ハンドメイドのギター作りにおいて、木工を中心としたクラフト・ワーク技術の高さがギターの評価につながることは多い。しかしクライン・ギターの場合、それだけではギターの魅力を語ることはできない。美しい現代的なアート・ワークはもちろん、音響工学の理念に基づいた独自な構造そのものがオリジナルであり、このギターの魅力なのである。あえてトラスロッドを廃したローズウッド・ネック、低音部と高音部がセパレートに分かれたインピーダンス・マッチング・システム・ブリッジ、グラファイト・フィルムをラミネートしたフライング・ブレイスなど、パートのひとつひとつにクラインの新しいアイディアが生かされている。それでは、そんなステイヴ・クラインに彼のギターに関する設計思想を語ってもらおう。

まずはギター製作を始めるに至った経緯と今までの経験から話してください。

生まれはサンフランシスコで、ローティーンの頃から色々な音楽に興味を持ち始め、それにのめり込むまでそう時間はかからなかったよ。高校に入って、ギターをプレイしようと思ったんだが、エレクトリック・ギターとアンプを同時に買うお金など無かった。そこでギターを自分で作れないものかと考えたんだ。当時知っているリペアマンがショップを持っていて、そこにショッピング入りした。彼はリペアの工程を写真に記録していたので、それをよく見せてもらったよ。だから、最初は彼から教わった事が実際に役立ったんだ。

最初に自分で作ったのはウォルナットのソリッド・ボディのギターだった。せっかく作るんだから、何か変わった形のギターを作ろうと思ってヴァオックスのファンタムみたいなシェイプにしたんだ。あまり人に見せられるような代物じゃなかつたがね。ところがそのギターを買いたいという人が現れて、それが100ドルで売れたんだ(笑)。で、それに味をしめてその後8本ぐらいエレクトリック・ギターを作った。ボルトオンのものからスルー・ネックのものまでね。

アコースティック・ギターの製作はいつ頃から?

エレクトリックを作っていたのが60年代の後期で、アコースティックはその後だよ。マイケル・カーシャという物理化学学者にめぐり会ったのがきっかけなんだ。当時の祖父はバークレー大学で教鞭をとっていた関係でマイケルと知り合った。マイケルがギターという楽器の構造に興味を持ちだし、私が持っていた安物のアコースティック・ギターの構造を調べたりしたんだ。ところが、ギターのブレイス・パターンは物理化学者の立場から考えていたものとはまるで違っていた。そこでマイケルはギターの設計を物理的な見解から始めることにしたんだ。ただし彼はギターを実際に作る事に関しては素人だったので、エレクトリック・ギターを作った事がある私がお手伝いを仰せ付かったという訳さ。最初の頃は、彼のアイデアを私が実際の形にするという作業を行っていたんだ。

どういうコンセプトのギターですか?

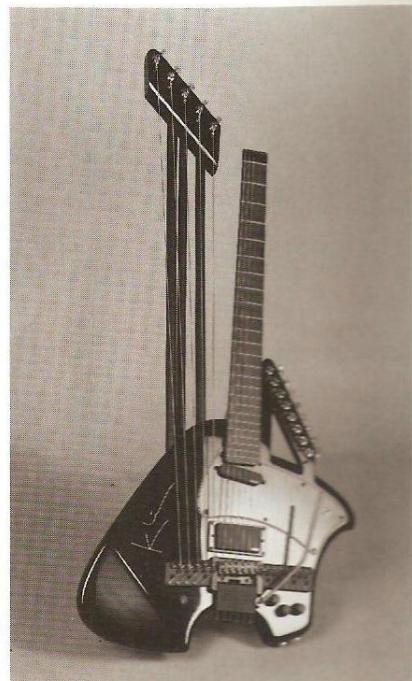
とにかく形や構造が今までにあったものと全く違うギター、しかも楽器として優れているものを作ろうと思ったんだ。

ギター作りに必要な木工技術などは、どのように学んだのですか?

随分遠回りをしたよ(笑)。私は製作家に弟子入りした訳ではなかったからね。何人かの製作家に教えてもらおうと思ったのだが、当時は今と違って製作家同志で技術を公開しあうなんて事は無く、全くの秘密主義だった。だから試行錯誤の繰り返して学んだんだ。

自分の工房を構えたのはいつ頃ですか?

最初にギターを作り出した頃で、家のガレージを自分で改造して作ったんだ。その後しばらくして、友達がオークリンドで自動車修理工場をやっていたのでそこへ移った。それが74年の事だよ。2年程その場所で製作や修理をやっていたんだ。もっともフルタイムじゃなくって、他にも色々と仕事をやっていたけどね。ところが、友達がそのオート・ガレージを廃業しまって(笑)、それで父親に相談したら父がソノマに持っている3エー



m Guitars

新しいギターオン

カーナの土地を与えてくれたんだ。それで76年の7月にこのソノマに移ってきたってわけさ。

ソノマに移ってからは、フルタイムでギター製作を?

いや、それが違うんだ(笑)。そうしたかったんだが、生活の為にアンティーク家具の修理とか色々やったよ。そして、85年にやっとフルタイムでギターの仕事をする事に決めたのさ。

それ以後の仕事の内容について話して下さい。

ギターの修理も多く手掛けたが、アコースティック・ギターの製作、そしてエレクトリック・ギターのカスタム・オーダーを中心製作してきた。もうひとつは新しい楽器のデザイン。エレクトリック・ギターの世界に何か新しいスタイルを提案してみたかったんだ。私の友人にカール・マーゴアスという男がいて、彼が私に会う度に「立っても座っても弾きやすいギターを作れ」ってしつこく言うんだ(笑)。「これは決して商業的に成功しないだろうな」というのは分かっていたんだけど(笑)。とにかく不格好でさ(笑)。

そのギターがスタインバーガーGKの原形になつた訳ですか?

そうなんだ(笑)。あともうひとつはロニー・モントローズとアイデアを出しあって設計した「MK(モントローズ・クライン)」というギターもある。これはロニーが「俺もニール・ショーンみたいにギターをデザインしてエヨ!」っていうことで作ったんだ。彼はとても面白い人でね。それで彼の持っていたアイデアと、私が友達のカールの為に作ったギターのアイデアを組み合わせて作られたのがこのMKという訳さ。

その後ネッド・スタインバーガー氏とのリレー

ションが始まる訳ですね?

フルタイムでギター製作を行うようになってから、もっと楽器業界の事を知りたいと思って自分で設計・製作したアコースティック・ギターを持ってNAMMショーへ行ったんだ。そこで会った人々の中にネッド・スタインバーガーがいたのさ。私は彼が設計した楽器を見て、そのアプローチに非常に関心を持った。そして彼に自分の作ったギターを見もらったんだ。相手は突然のこと、驚いていたよ(笑)。でも私の考えやアイデアに興味を示してくれて、それ以来彼と付き合いが始まつたという訳さ。

スタインバーガーがあなたのデザインを採用する経過はどうでした?

ネッドと知り合ってからしばらくして、スタインバーガー社はギブソンの傘下に入った。そして私は突然ギブソン社から呼び出しを受けたんだ。彼等は私が何か新しい試みを新生スタインバーガーに対して出来るのではないか、って考えたんだろうね。早速ネッドや他の開発担当者と話を詰めていった。そこで、長年考えてきた“立っても座ってもとにかく弾きやすいギター”というコンセプトと、スタインバーガーのデザインやハードウェアは実に相性が良い事に気付いた。そして、私には既に友人の為に作ってギターやMKモデルのアイデアが有ったから、それにスタインバーガーのヘッドレス・ネックとハードウェアを組合せれば、私の目的とする演奏性の高さと身体へのフィット感、そしてコンパクト性が同時に得られると思ったんだ。

ネッド氏の設計によるスタインバーガーは幾分無機質な印象を受けますが、あなたの設計による

GKはより楽器らしいですね?

そうかも知れないね。私の元々のアイデアはヘッドレスでは無かったからね。それで、89年だったと思うが再びNAMMショーのベースにMKモデルを持ち込んだんだ。スタインバーガー側の誰もがそのギターに興味を示してくれたよ。

あなた自身も、この工房でGKモデルを製作しているのですか?

私がここで製作しているのは、形はGKと同じだがネックはグラファイト製ではなく木を使っている、ボディ材も違うんだ。これはスタインバーガーのものと区別する意味で、“クライン・エレクトリック”と呼んでいる。この工房で作るクライン・エレクトリックは基本的にネックは木製、メイプルやワンピースのローズウッドもある。これはグアテマラ・ローズウッドを削り出したもので、堅さも充分なのでトラスロッドは入っていない。ボディ材もスプルース、ウォルナット、レッドウッド、面白いものではオ・マ・ボラというメキシコ産の材もあるよ。この木は木目に関係なく、あらゆる方向に対して均等な柔軟性を持っている。とても軽くて結構ブライトな音がするよ。それからソリッド・ボディだけじゃなく、スプルースの単板ボディを裏側から少しきり抜いて同じスプルースのバッグを貼った、チャンバー・ボディと呼ぶタイプもある。ピックアップも、EMGは勿論、セイモア・ダンカン、ディマジオ、ジョー・バーデン等、プレイヤーの望むものを何でもチョイス出来るんだ。クライン・エレクトリックはプロダクション・モデルじゃなく、それぞれのプレイヤーの為の完全なカスタムメイドだから基本のスペックなんて無いんだよ。

マイケル・ヘッジスのハープギターもその一つですね?

そのとおり。彼とは82年頃に知り合った。彼は私の作ったアコースティック・ギターを使っていてね。仲の良い友達だよ。彼は昔大型のダイヤ・ハープというアコースティックのハープにオートハープ用のピックアップを付けて使っていた。私に「何か新しいスタイルのアコースティック・ハープギターを作れないか?」って言ってきたんだ。それで話を煮詰めて図面を引いたんだけど、進めるうちにそれがとんでもなく大きなギターになってしまう事に気付いた。製作には莫大な時間と手間とお金が掛るので、発想を変えてエレクトリックでアコースティック風の音が出せるハープ・ギターの設計を思いついたのさ。

K-Bassについては?

K-Bassのコンセプトもクライン・エレクトリックと似たところがある。つまりホールド感の良さを目指したんだ。きっかけは3~4年前、ネッドが「次はベースを作ろう」と言い出してね。オリジナルのMKモデルのボディ・シェイプを流用する事を思い付いた。ところがスタインバーガーのベース用ネックは重い!(笑)それでネックが下がってしまうんだ。そこで色々考えて設計したのが3D(三次元)のコンタード・ボディというわけです。まず、4弦側のツノの部分をネック側に近づけた。これでストラップボタンの位置がかなり変わるから、ネックが起きやすくなつた。そしてそのツノを今度は後方向に曲げる事によって身体との密着感が増し、またストラップも長い部分で身体に当たるからネックが下がったりストラップがずれたりする事が無くなつたんだ。

ツノの部分は別の木を継いでいるきですか?

そう。基本的にアルダーの2ピースボディで、平板の状態でピックアップ・キャビティ等すべて加工しておいて最後にツノの部分を接着して3Dに仕上げている。



創造

同じボディ形状でギターも有るようですが?

うん、これは最近作ったんだ。K-Bassは93年のNAMMショーで発表したんだが、その時スティーヴ・ミラーがやって来て、「このベースのボディにスタイルインバーガーのヘッド付のネックを付けたギターを作れないか?」って言い出したんだ。

アコースティック・ギターについて説明して頂けますか?

さっきも言ったとおり、設計・開発に際してはマイケル・カーシャ教授のアイデアから非常に多くを学んだよ。私達はまず、"ギターの何がどのように、そしてどの方向へ動くか"という事から研究したんだ。例えば、ギターのボディをある周波数で振動させて、どのように動くかを調べる機械まで作ってね。ここにマイケルが書いた論文もあるよ。これは簡単に言うと弦の振動がどういう具合にボディに伝わって、ボディが振動するのかを説明している。"ギターの音を構成する要素の中で、弦そのものの振動が占める割合は意外と少なく、その振動がボディに伝わり音となって我々の耳に届く。但しボディは振動を增幅させるものではなく、弦の振動を耳に聴こえやすくするためのデバイスである云々..."という事が書かれてある。次の項はトップがどのように振動するかを説明しているね。もっとも、和音を鳴らした時はトップの動き方も変わってくるから、この論文は基本的な事についてのみ書いてあるわけだけね。

そういう研究から生み出されたアイデアについて教えて下さい。

うん。研究と実験を繰り返しながら、アコースティック・ギターの構造について一から設計したんだ。ブレーシングのパターンやブリッジの構造とかね。このブリッジはインピーダンス・マッチング・システムというんだ。左右非対称のブリッジで、6弦側の振動は大きく、1弦側の振動は小さい事からそれぞれのインピーダンスをマッチングさせてこのデザインになったとい訳さ。

ボディのサイズはかなり大きいですね?

アコースティックのボディには二種類のサイズがあるが、大きい方のボディは幅が18インチ(約45.7cm)ある。これは14フレットでネックをジョイントするボディとして、演奏可能な限りトップを大きくしたかったからなんだ。

低音域を狙ったからですか?

そうだよ。低音域がしっかり出る事を狙ったんだ。今迄のどんなアコースティック・ギターでも得られなかつた低音域をね。自分でもオープン・チューニングで弾く事が多いし、Dまで下げる事はよく有る。ジョン・ミッチェルも私のギターを使っているが彼女はCやBまで下げるからね。例えチューニング・ダウンしても、低音をしっかりと出したかったんだ。

トップが大きいと強度的には大変ですね?

そうなんだ。その為にまず、"フライング・ブレイス"という変わったブレイスが入っている。これはこのギターの構造上のメインとも言えるブレイスだ。考え方としては、Xブレイシングの本来の役目、つまりサウンドホールとブリッジの間の部分を補強する為のものだよ。但しこの部分のブレイスのすべての部分をトップに取り付けることはしなかつたんだ。このブレイスはサウンドホールとブリッジの間の部分だけをサポートし、ブレイスの両端は左右それぞれボディのサイドに固定している。必要以上にトップを固定しないで、これだとトップは自由に振動する事が出来るんだよ。なおかつ、このブレイスは1弦側にブリッジの横の部分に少しだけトップと接触しないよう削ってあるんだ。高域を殺さないためにね。だから横方向のすべてを固定している訳じゃなく、トップは

自由に振動することが出来るんだ。

トップ材の実験機が壁に掛けてありましたか、それについて説明して下さい。(P152)

あれはもう随分以前に作ったもので、トップにブレイスやブリッジ等すべてのパーツを取り付けた後、あの木枠にセットして弦を張り実際のギターと同じ状態でトップの振動を目視出来るようにと考えて作ったものだよ。これでチェックしてトップが意図した通りの動きをすれば、そのトップを外してそのままギターに組み込んでいたんだ。

さきほど話して頂いた低域以外にコンセプトとして意図したもののは?

音のバランスだね。低音域をしっかり出したかったのも実は全体的なバランスを考えたからなんだ。例えばピアノのように、高い音から極低い音まで同じパワーで、同じサステインが得られるようなギターにしたいと思ったのさ。殆どのアコースティック・ギターのブリッジは、バイパス・フィルターのようになってしまっている。高音弦も低音弦もひとつの三角いプレートに固定てしまっているので、それが干渉し合って高音域と低音域がしっかりと出てこないんだ。

ヴォリュームについてはどうですか? クライン・ギターは一般的なアコースティック・ギターと比べて、倍近く音量が有るよう思います。

そうかも知れないね。ヴォリュームについても、多くの要素が関係していると思う。今迄トップやブリッジの話ばかりしてきたけど、ギターっていうのは全体でひとつのシステムだから、サイドやバック等他の部分もトータルで考えなくちゃいけない。すべての要素が直接音に関係してくるんだ。例えばネックについて言えば私はローズウッドで作っている。マホガニーのネックは作らない。柔らかい材料をネックに使うと、弦のエネルギーがそこで失われてしまうと思うんだ。そのエネルギーがそこで鳴らす上で必要なものだからね。

今後アコースティックに関しての新しいアイデアはありますか?

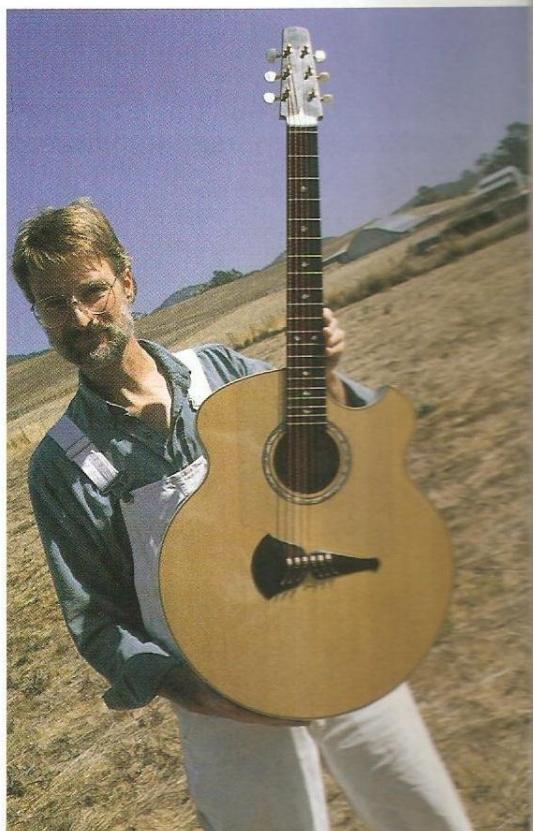
実はテイラー・ギターのボブ・テイラーから、新しいアコースティック・ベースの設計を依頼されているんだ。近日中にプロトタイプを提出する予定で、このベースに関しての詳細は今言えないがそのプロトタイプの製作を私のパートタイム・パートナーで製作家のスティーブ・カフマンと一緒にやっている。

クライン・アコースティックを愛用するプレイヤーが増えるのを楽しみにしています。最後に、あなたが考える理想的ギターとは?

私が個人的に考えるベストなギターとは、"人々がいつも何気なくプレイするただのギター、ただのギターという楽器"なんだ。さっきも言ったとおり、木工の技術などで私は随分遡りしてきた。工芸的に見て、美しいギターを製作している人達は大勢居ると思う。でもギターである前に工芸に凝り過ぎたものも少なくは無いんじゃないだろうか。そういったギターを手にした時、触れた時にふと感じるんだ。何が違っているんじゃないかな?ってね。私にとってのギターとは、友達であり家族なんだ。ギターの音を聞きながら、ギターを弾きながら共に成長し、落ち込んだ時には勇気づけ励ましてくれる、そんな存在なんだ。こういった思いはミュージシャンの誰もが持っているんじゃないだろうか。そしてその感じ方は人それぞれに違うんだよ。手にした時の感触や膝にのせた時に感じる重さ、といったものがギターを弾く上でとても大切な事なんだとと思うんだ。私が製作していきたいギターとは、"プレイヤーの感情を表す事が、可能な限り容易に出来るギター"。いつもそう思いながら製作しているという訳さ。



What's Up Now?



on guitars